

たかが川柳されど川柳（八）

上野 一彦

父との別れ

よくある父子関係のように、私と父の関係もさほど良くはなかった。というよりオイディプス・コンプレックスのごときある種の対立関係、緊張関係が常にあったように思う。

青年期、父のようにはならぬというそんな青臭い考えに支配されて生きてきたところもある。逆に、それだけ父の存在を強く意識して生きてきたのかもしれない。お互いにそんな関係を解消しようと努力しない訳でもなかったが長

くは続かなかった。常に母が間にあって、緩衝材となって苦勞を掛けた気がする。

母が一〇年前に亡くなり、直接父と関わる機会が増えた。しかし孤高の名にふさわしい生き方を好み、自分のペースを決して崩さぬ姿勢に、唯一の近親者である私は離れたくても離れられず、家内の手を借りながら見守るしかなかつた。四谷の有料老人ホームと契約し、日当たりのよい広めのトイレ付きの部屋を書斎と称し、机とパソコン、ベッド、母の思い出の品々を持ち込み、入居者の中でただ一人、二度の食事と自称執筆のためだけに通う生活を六年続けた。

そこに泊まったのは台風の接近で、交通機関が乱れたとき一度だけだった。入浴は毎朝自宅で、また土日だけ自宅炊飯と近所のスーパーで買って来たおかずでやはり一日二度の食事を済ませた。身を案じ、時折訪ねる、近所に住む姪や私たちの運び込むおかずがそれに色を添えた。

そんな日々を一変させたのは渋谷駅の大開発だった。きちんと同じルートでホームに通っていたのだが何十年も使ったバスの下車口の度重なる移動、新しい鉄道の乗り入れ、東西南北も分らず、表示板だけでしかたどり着けない乗り換え口・・・彼の時間と地理の見当識は一気に狂っていったようだ。彼ならずとも私自身、馴染んできた渋谷駅が、今は標示板頼りのただの地下の迷路と化してしまっただけだから無理もない。

新しきアリの巣窟を徘徊し

件のホームにたどり着けない、帰りに乗り間違えて迷子になる、駅員と喧嘩をしたり、パトカーのお世話になったりすることもあった。几帳面に電車の時刻表のように生きてきた父が、まるで不登校児のようにホームを休みがちになり、一気に老化が進んだ。

自宅での介護の体制を整えることも考えてはみたが、他人の世話を好まぬため、世話する人も長続きしたためしはなかった。早晩、ホームへの完全な入居が予想されるわけで、ただただ安全確認とバランスの良い栄養摂取、清潔な身辺生活の介護を心配する比重が増していった。しかも、老人扱いする言動には特に敏感に反応し、人の意見に耳を傾けない頑な老人との闘いでもあった。

昼夜を問わずの電話があるうちは、安全確認という意味ではまだ益しだった。一日一回の定時の連絡に返答がなく、近所のマンションに住む息子に部屋の明かりの確認を頼んだが、カーテンを閉め切っているので分からず、早朝、旅行を打ち切って駆け付けたことがあった。表玄関は内側から施錠されており、電話にも呼び鈴にも返答なく、鍵屋を呼んで何とか室内に入るとベッドで寝ているではないか。

「お父さん！」と声をかけると、「こんな夜中になんだ！」と怒り始める。午後二時のことであった。

そんな危機的状態が数か月続き、彼からのSOSとこれからの生活形態への押し問答が度重なったある日、失禁がきっかけとなって、「一度ホームで暮らしてみたら」の言葉に初めて頷いた。徒歩で十五分ほどのところに私の自宅はあるのだが、車を取りに戻る間にまた気が変わるかもしれ

れないと思ひ、とりあえず身の回りのものだけ持って、タクシーでホームに連れて行つた。振り返ると、あれほど自宅に執着した父だったが、それが自宅の玄関を出た最後だった。

ホームでも当初は馴染むまでに、退去と隣り合わせの緊張した時間が過ぎた。医者の方方がよかつたのか、ホームでの規則的で刺激の少ない環境にやがて慣れ、一時帰宅も不安のほうが高く結局自宅には帰らずじまいであった。ホームで暮らし始めてからは、週一で訪れるたびに将棋好きの父に「一番指しましょうか」と促した。その一番を汐に帰るのが習慣になった。

父との長い関係のなかで、初めて穏やかな時が流れるようになった。あれほど好きだった将棋も、かれが不覚にも二歩を指し、待ったを勧めても、「上手の負けは負け」とそれ以来指したがらなくなつてしまつた。やがてレビー小体型認知症*の症状が現れ、「派手な陣羽織を着た猫の武者の騎乗」といった荒唐無稽な幻視などの話に付き合うことが多くなつた。正直、そんな父がかわいいとさえ思ひ、優しく接することができる自分に、何とか親孝行が間に合つたと思へたほどであった。

状態が安定しているのでホームに入居後、二年目の夏、

家内とかねて計画中だった北欧三国への旅行に思い切つて出かけた。旅行は充実したものだったが、旅の後半、留守を任せた子供たちから父の容態があまりよくないとの知らせを受けた。担当の医者とも電話で直接話し、数日後、帰国する旨を伝え、本人が苦しまないことだけを最優先してほしいとお願ひし帰国の途に就いた。

成田に着くなりホームに駆け付けたが、まるで私たち夫婦の帰国を待つていたかのように翌日、他界した。かねてより、「一〇〇歳まで生きると見世物的なので九九歳で逝く」といつていたが、惜しいかな二か月足りなかつた。枕もとで魂が静かに飛び去るまで見届けたが、最期に親孝行らしきことさせてもらいたただ感謝であつた。

死という別れはたくさんの思いを運ぶものである。いま改めて父の様々な思い出をかみしめている。

*認知症の一種で、記憶障害、動作が遅くなり転びやすくなるパーキンソン症状、繰り返し幻視がみられる。患者自身には病気であるという認識がなく、男性の方が女性の約二倍発症しやすく、他の認知症と比べて進行が早いのが特徴といわれる。

たかが川柳 されど川柳 (平成二八年下半年期)

この九月からこれまでの川柳同人「多年草」の他に、歴史のある川柳同人「だんだん」にも参加することになりました。隔月の開催なのですがそこに寄せた拙句もご紹介いたします。

七月

多年草

わが夫離脱できずに残留し 金賞

離脱か残留か。イギリスのEU離脱の予想外の展開に全世界中が驚きました。その衝撃を妻に成りすまして読んでみました。

リオ五輪セコイも辞書で参加する

都知事のせこさはついにそのまま英語になつたと聞きました。最後までオリンピックに行きたいとのあがき。結局、残つたのはセコイという言葉。

子供らの湧く嬌声で海開く

プール開き、海開き、夏休みを待つ子供たちの歓声が聞こえそうです。ちよつと川柳実は薄いのですが。



(ジャスミン 裏の路地で)

題詠「知る」

山里のシャイな草木に名をたずね 佳作

山歩きするとひっそりとした自然の中にさまざまな草木を目にする。その名前をすこしでも知りたいと思うのはハイカー共通の思いですね。

一票の重みをいつも後で知る

選挙のから騒ぎ、終わってみるとその大切さを改めて感じます。浮動票が決め手とか、投票率が低いと有利なんて言う報道を聞くと・・・

天知る地知る文春知る人知る

週刊誌報道がきっかけとなってさまざまな問題が露呈します。「天網恢恢疎にして漏らさず」とか、「天知る地知る人知る」とかいいいますが・・・

八月

多年草

ドア開くセミの合唱ローカル線 佳作

盛夏、片田舎のローカル線無人駅、ドアが開くとワーンとセミの大合唱が飛び込んできてびっくりしたことがあります。夏に旅行をするとこんな情景に遭遇することが何度かあり、自然が濃いというか、日本の原風景のような感じがします。

がします。

別れ際おそろく次は葬式で

この歳になると、久しぶりに親しい友人と会い懐かしくも楽しい時間を過ごした後、別れ際に「じゃお元気で、また」と言いつつ、この次、会うのは彼の葬式？いや自分の葬式？なんて思い見送ることがあります。振り返ると向こうも振り返って見ていたりして。

認知症進み本人パラダイス

親など高齢化し（こつちも立派な高齢者なのですが）、在宅介護で疲れ果て、ホームに入所などという図式はよくあります。本人の認知症が進むと、周りの心配や苦勞をよくそこに、当人は天真爛漫。まさにパラダイスです。

題詠「嵐」

花よりも嵐の記憶ばかりです

花も嵐も踏み越えてとは言いながら、人生振り返ってみると嵐の時ばかりが思い出されます。こんなマイナス思考ではないけれど、花の時を強く強く思い出そうとはするのですが・・・

言い訳が二度目の嵐呼びました 銀賞

何かささいなこと原因で家庭内に嵐を呼んでしまうことがあります。こんな時はじつと過ぎ去るのを待つのが妙と

いうものなのですが、うっかり言い訳などしようものなら嵐がまた嵐を呼んでしまいます。

台風の日だと知らずに油断する

嵐が小休止、過ぎ去ったと油断をするとそれは台風の日なんてこともあります。人生にも似たようなことがあり、やれやれなんとか過ぎ去ったと油断をすると、まだそれは終わってなくもう一度嵐になる、そんな経験はありませんか。

九月

だんだん

父の日に自分のための酒を買う 佳作

五月第二日曜日の母の日の添え物のように存在する父の日。家庭でも存在の薄くなりつつある父としては致し方ないこと。多少反発して、自分のために少し上等な酒を自分のために買う。なんとなくいい感じもあります。

責任は法と道義のやじるべえ

政治資金規正法、ザル法ですから法的に責任はないの言い逃れ聞き飽きました。しかし、道義的責任が政治家には大事じゃないではないですかね。
やっと来た巣立ちの後の肌寒さ

断捨離のついでに夫整理され
いつ頃からこの言葉流行りましたか。年とともに断捨離すること増えてきました。やがてこうるさい夫も断捨離の憂き目を見るのではとの自戒です。

子供たちが巣立ってやれやれ。エンブテイーネストの言葉聞いて久しいが、ほっとする反面、老夫婦への道をひたばしる一抹の寂しさも。

題詠「川 河」

その川も今は暗渠と名を変えて 佳作

滔々たる大河、小鮒釣りしかの川。川は郷愁と人生を思わせます。都会ではそこにあつたはずの川が蓋をされ、消えてしまうことも。

できるなら三途の河で友釣りを

否応なく渡る日が近づいてきています。いっそ居直ってその川で釣りはできないのかな。友釣りは鮎などで知られますが、友と二人で友釣りなんて、悪趣味かな。

ノに生まれやがてリとなり 川となる

子供が生まれて間に挟んでの川の字はよく知られますが、夫婦は「リ」の字、その前は「ノ」の字かなと。

多年草

断捨離のついでに夫整理され

いつ頃からこの言葉流行りましたか。年とともに断捨離すること増えてきました。やがてこうるさい夫も断捨離の憂き目を見るのではとの自戒です。

ジジイの燃料切れを孫は無視

目に入れても痛くないほどの孫です。下の子ができればジジイは自分の専有物。いわゆる爺さん子なのですが、あふれる孫の活力の前にいささかくたびれます。でも許されません。

BSが睡眠不足を加速する

オリンピック、ゴルフ、テニスと地球の反対側のTVプログラムは、あとでVTRでとおもうものついでLIVEで。それですっかり睡眠のリズムは崩壊、慢性的睡眠不足から睡眠障害へ。

題詠「熱」

風鈴も眠り邪魔する熱帯夜

今年の夏は暑かったですね。クーラーはどうも体になじまず、秋の夜気を待ち焦がれます。涼やかな風鈴の音まで暑さを増幅する熱帯夜です。

年金の決定通知解熱剤

老人を大切にしない代表国ですが、年金の通知を見るとなんとなく減額されているようで、このままいくと一体どうなるか。そんな通知はまさに解熱剤。

あの頃の熱き血潮は今氷河

青春の熱き血潮もやがて潜在化しマグマとなつていつか

冷え固まります。今は氷河となつてただ溶けていくだけ。

一〇月

多年草

五輪終え日本全土が安眠す

BS放送は地球を狭くしましたが、時差を超えての放送は生活のリズムを乱します。五輪のようにそれが続くと慢性睡眠障害です。

窓開けて熟睡するも風邪ひいた

熱帯夜が続き、寝苦しく輾転反側。クーラもなかなか調節が難しい。でも秋口になってやっと夜風が快適に感じられるようになります。でも明け方くしゃみをして・・・

都の役人盛り土の案を空洞化

都知事選後の都の行政の暗黒部分。だが、いつ、どこで調べれば調べるほど、その闇は・・・役人の傲慢さ、個狡さ、小利口さがだんだん明らかに。これこそ民主主義の空洞化。

題詠「見栄」

松茸は香りだけだと云ってみる

国産の松茸の値段を見てびっくり。カナダ産や中国産じゃといつてあきらめる。土瓶蒸しもまず松茸本体を食べ

たいが、汁だけ飲んでおつに済ます。

終活は見栄と写真をまず整理 佳作

就活とか断捨離の最初はまず見栄を捨てることから始まります。

膏薬の代わりに俺は見栄を張る 佳作

張つていいのは親父の頭ならぬ膏薬。でも見栄でも張れるうちはまだましというもの。

一月

だんだん

耳鳴りとセミの声とがハーモニー 佳作

血圧のせいか耳鳴りがします。夏、セミの大合唱に、これは耳鳴りかセミか区別がつかなく。それをハーモニーとしてみました。

ミサイルで国威発揚の外れ

国際的に立場が悪くなるとミサイル発射するお国があります。国威発揚のつもりらしいが、発射に失敗することもあります。いずれも的はずれ。

わが家では生前退位済んでます 優秀

昭和天皇が生前退位を望んでいるとかいないとか。激務なんでしょね。それに比べ、定年後、すっかり主夫に徹

しているわが身は、とつくの昔に生前退位かと平民を謳歌。

題詠「薬」

医者だつて飲んで浴びます般若湯

般若湯とはうまい命名。浴びるほど飲むという表現もあります。私の主治医は、自然派で口を開けば「体重を落とさない」と、そして無類の酒好き。ついこんな一句ができてしまいました。

飲み残す薬で店が開けそう 佳作

いろいろ薬が増えてきます。飲み分け、分類だけでもたいへん。ついつい飲み残した薬が増えてきます。認知症だった母が、山のように薬をため込んでいたことを思い出した。

百薬の長と眩き今日も呑む

知恵者とはいつの時代にもいるものです。酒は百薬の長とは適切な量ならばそうなんでしょうね。それを信じて飲みすぎたら何にもなりません。

多年草

なあ孫よジジとジジイはちがうのよ 佳作

いつもわたしを「ジジ、ジジイ」なついている三歳の孫が、ある日、言い間違えてか、私のことを「ジジイ」と

呼んだ。どつきりするやら、その違いをどう教えたらよいやら・・・

語の乱れ受け入れるのも民主主義

ら抜き言葉もそうですが、辞書にも本来誤用であるがと断りつつそうした使い方もあるという。語の乱れは文化の乱れと思いつつも多勢に無勢。多いもの勝ちは民主主義ですか。

大統領なればなつたで様になる

米国大統領選挙は大番狂わせ。世界中がポピュリズムの大波に洗われる。大混乱が予想されるものの滑り出しは結構様になってるので驚き。いつ馬脚が出るかわかりませんが、予想が外れることを祈りつつの一句。

題詠 「売る」

古物商売りにだすならまず亭主 銅賞

断捨離とか終活とか、そんな言葉がちらつく昨今。お宝、骨董も結局は「大事にしておいてください」で終わり。最初は売りに出すなら「まず家内」とやったが、とんでもないと「まず亭主」になりました。

政治家は良心売って大物に

最近の政治家ならぬ政治屋ばかりが目立ちますが。結局は良心的なんて言うのはもともと政治家には不向き。良心

売れば売れ程、今時の政治家は大物と思えば納得。

商いは真心売ってお銭(あし)得る

なんだか標語みたいですが。商いで真心を感じさせてもらいたいものです。それがまわりまわって本当の利益。そういう世の中で生きていきたいものです。

一二月

多年草

次々とスマホが紡ぐ流行語

毎年恒例の流行語大賞。略語ばやりのスマホ言葉など日本語を壊していくようで感心しません。そんな語をもの真似し若ぶる老人にだけはなりたくない。

弾効も崖つぶちかも民主主義

お隣の国での大統領弾効。民衆の勝利とはいいが、ある種のポピュリズムの横行という気もしないではない。成熟した民主主義とはどこか違う気がする。

もう安心画面に貼ったパスワード

セキュリティが厳しく、いつの間にかパスワードが使えなくなつて困ることが多い。何とか更新のルールと思う何がなんやら、どれがどうやら隘路に迷い込む。いつそわかりやすく張っておこう。

題詠 「送る」

待っている俺もすぐ行く野辺送り

同世代の訃報が多くなる年頃。ショックもあるが、自分も間もなくかなと実感するようになるとこんな言葉も言いたくなる。

狼に成れずに帰る優男

送り狼なんてすごい豹変ぶり。よい人であり続けて結局どうでもよい人となり別れをむかえるなんてこともありそう。女心をつかむのは難しいものですよ優男さん。

変換ミス気づくその時送信し

ワープロは私にとって神の手。あわてんぼうの私は変換ミスも目立ちます。気づいて直そうとして送信キーを押してしまうこともたびたび。

(了)



(ヒスイカブラ 神代植物園にて)